
明けた空に見えたモノ

香月 圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明けた空に見えたモノ

【Nコード】

N5632A

【作者名】

香月 圭

【あらすじ】

何も掴めない絶望の淵にいた「アキ」の、出会いと旅立ちの物語。アキの行き場のない苛立ちと空虚な感情のなか、そこに見えた「明けた空に見えたモノ」

第一話「雨」

朝から降り始めた雨が未だやまない。
テレビのニュースは梅雨入りを宣言したけれど、
とつくに私には梅雨がきていた。

夜になつても明るいこの通りを、何も考えたくなくて歩いていると、
キャッチのお兄さん達が呼び止める。

…どうでもいい。

なにもかもが色褪せて見えてくる。

「どっつ？うちの店で」

…でもこんな状況で誘いに乗る程アホじゃないやい……。

「ごめんね」

にっこり微笑んで、足早に路地裏に入る。

…ばかみたい。眩しいくらいだったネオンは、一步路地に入れば闇
を濃くするだけでしかなかった、
傘を打つ雨音が消えていた事に気付き、傘を閉じると大きく降って
雨粒を落とした。

ガシャーン

…あ、やば。

そこにあつたゴミ箱のいくつかが倒れて、中にあつた生ごみが散乱
している。

私は考えるより早く走りだした。

行くあてがあるわけじゃない。

とにかく路地をまっすぐに走って、走って、赤いライトが点灯する踏切の前で、息をきらしながら後ろを見た。

誰もいない。

それでもしばらく息をきらしながら後ろを見てみると、煩いまでに鳴り響いていた踏切の音が途切れた。

さすがにもう誰もこないだろう、と、最後に大きく息を吐き出すと、踏切をわたろうと振り向いた。

「大丈夫？」

…息が止まるかと思った。振り向いた目の前に大きな影があって、そいつが喋った。背が高く、真っ黒なスーツを着ている。さらりと流れる前髪をたらし、背の低い私を覗き込む。

「おいで」

そう言うと、私の手を掴んで走りだした。

でも私の足はもうすでに限界を越えている。

もつれはじめているのに、彼の勢いにひきずられていた。

「な、なに!?!」

そう言うのが精一杯。

一体何なんだろう。

ていうか、こいつ誰？

「俺、シンイチ」振り向きもせず、楽しそうに走っている。
こいつ、ばかなんじゃないの？

「名前なんて聞いてないっつーの」
「名前に話す事すらできなしない。運動不足だよなあ、なんて考えながら。」

シンイチの流れる髪を見てた。

カンカンとやたら響く階段を駆け上がり、どっかのビルの屋上のドアノブに鍵を入れた。

なんでこいつ、こんな所の鍵持ってんの？

がちや、と、重い音がしてドアは開かれた。少し生暖かい風がシンイチの髪を撫でる。

しばらくして私の肩にかかる風にも風がやってきた。

目の前にはネオンの洪水。

さっきまでいた場所がまるでちっぽけな場所のように、あくせく動く人間がまるでおもちゃのようだ。

「俺は聞いている。名前は？」

「……アキ」

第二話「鍵」

私が産まれたのは海の近くの田舎だった。
周りには何も無かった。

大きなデパートも、おしゃれな店も。

だから、ここに来た。

思い切りおしゃれに生きたかった。

思い切り笑いながら生きたかった。

それなのに。

今、私に何があるんだろう。

何を手に入れたというのだろう。

適当にみつけたコンビニのバイトで、

知り合ったくだらない男にはまって、

気がつけば、おしゃれなモノも買えないくらいにそいつに貢いでた。

気まぐれにかかってくる電話を待ち続け、

夜中、酔っぱらいながらかかってくる電話に振り回され、

明日仕事があっても呼び出されれば、出かけてた。

あいつ好みの軽そうな女を演じれば、

くだらない男が声をかけてくるようになった。

こいつも、そうかもしれない。

私はいつしかまず最初にそう疑う癖がついてしまっていた。

こいつ。

そう。私をビルの屋上に連れてきたあいつ。

「シンイチ」

「いいだろ。ここ」

シンイチは私のほうも見ず、眼下に広がる光の湖を見ていた。

「…車がおもちゃみたいね」

細い道路で渋滞になって動く気配すらしない夜の街を見ながら、ほんとに小さい、と思った。

「気に入った？」

私のほうを振り向いたシンイチの前髪が、ゆるやかな風でふわりと揺れる。暗くてよく見えないけれど、その影のある笑みが気になった。

私はまだ眼下にひろがる無数の光を見つめていた。

こんな小さな世界で、

何をやっているんだろう。

私のやりたかったことって何？

手に入れたいものは何？

…くだらない。

それまで悩み続けた色々な事がなぜかばかばかしく思えてきた。

走って、走って、この景色を見たら、
それまで重かった悩みも、ぜんぶちっぽけだ。

「ここに来たかったらいつでも来たらいいよ」
そういって、奴はポケットからさっきの鍵を出した。
そうだ、こいつ何で鍵なんか持つてるんだろう。

「なんでこんな鍵もってんの？」
やっとシンイチの顔をしっかりと見た。
整った顔立ち。流れる前髪。そこにある微妙な笑顔。

「内緒」

全く。こんな事を何人の女にしてるんだろう。
一人でここに来たとしても、違う女と逢う事もあるかもしれないな。

「くれるの？」
お金もないし、体で払う気もない。
でも、実はこの鍵は欲しいかも、なんて都合のいいことを考えてみ
た。

奴は少し楽しそうに笑いながら
「あげるよ。そのかわり…」

…ほらきた。
こいつもか、と、その時そう思ったんだ。

第三話「電話」

「今何してんのぉ？」

寝ぼけ眼で時計を見ると、1時15分。もちろん夜中。

「ジユン、また飲んでるの？」

「今から逢おうよー」

彼女がちゃんといるくせに、こういう事を平気でするあいつは、自分もてる事をちゃんと知っている。

そして、私がジユンの事が好きだということも知っているんだ。

彼女と別れる気配もないし、割り切った付き合いをする程落ちぶれたくはないいつも思っている。

だから、逢って話をして、キスするだけ。

一度…そうなってしまったことはあったけど。

「ごめん。無理」

「えーなんでえ？」

「昨日寝てないんだ。ていうか、彼女どーしたのよ」

「あー？彼女？ なにそれ」

「昨日一緒にいたでしょ。見たよ」

「……ああ。うん」

「別れる気ないんでしょ？私そーゆうの嫌だから」

「……ねえ、逢おうよ」

「…なんで？」

「話したいよ。つかアキも話したいっしょ？」

どうしても彼に弱みを見せる事ができない。

弱みを見せてしまえば、泣いてしまえば、彼に溺れてしまいそうで、それがすごく恐かった。

昨日あんなに落ち込んで、あんなに世界が色あせてしまったのに、ジユンの【逢おうよ】の一言でなかったことになってしまいそうな自分をとどめるのに精一杯だった。

昨日の夜シンと話した事を思い出した。

『そのかわり、今の彼氏と別れてね』

『はあ?』

『だって、今そうやって泣きそうなのは、彼氏のせいだろう? ろくでもないよ。泣きたいのに泣かせない彼つてのはさ』

『…逢ったばつかのあなたに何がわかんよ』

『わかるよ。瞳を見ればだいたいね。違った?』

『……違う、…くない、けど』

『泣きたくなったらここにおいで。寂しくなったら…』

「アキ? 聞いてんの?」

いきなり耳元にひびく大きな声で現実に戻った。

「ああ、ごめん。やっぱ無理」

「昨日、なんで寝てないんだ?」

「……色々あってね」

きつとジユンは自分と彼女の姿を見たからだと思っただろう。間違いではないけど、それだけでもない。

ただ…やっぱりこのまま続いたって私は幸せになれない。

だから、好きなのはお前だけって言って？
お願いだから、私をちゃんと見て？

「んー、わかった。んじゃね」

むなしく電話の切れる音がして、ジュンの声も消えた。
きつと、次の女にでも電話してるんだろう。

時計を見れば1時半。

携帯を時計の横に置こうとすると、かちやりと何か当たった。
昨日の鍵、だ。

「寂しくなったら電話してきていいよ」
そう言ったのは、あいつ。

【シン】だった。

第四話「訪問」

最悪な目覚めの朝。

窓の外は久々に覗く太陽の日差しと、さわやかな風でつつまれているというのに、

私の目覚めは最悪だった。

いきなりの訪問。

時計は夜中2時をまわっていた。

冷蔵庫にストックしてあったジュンの為のビールを2本あけたところで、

突然鳴り出すチャイム。

2度3度としつこく鳴るドアチャイムに観念して出ると、

ドアの前には見慣れた顔があった。

「…どしたの？」

半ばあきれながら声をかける。

「何してたの？」

疑問に疑問で答えるときは、だいたい言いにくい時のジュンの癖。

「今、何時だと思ってるの？」

「飲んでたの？」

「……帰って」

「一緒に飲もうよ」

会話が成り立ってないという事にジュンは気が付いているんだろうか。

このままじゃ話が進まない。そもそも今までそれを許してきた自分に問題があるのか、

それともジュン本人に学ぶ意志、考える気がないのか、そういう甘えがいつまでも通用すると確信している部分が奴にはある。

「コンビニ寄ってきたんだ。アキの好きなプリン買ってきたよ」
「今日さ、先輩と現場入ったんだけど…」

（駄目だ。負けそうだ…）
こういった場合、自分の意見を押し通せるほど、私は強い意志を持ちあわせていなかった。

玄関先でぐだぐだと話するには、時間がまずかった。

なにせ夜中2時を回っている。右隣は同棲カップルだから、まだいいとしても。左隣はえらく年上のおねえさま、だ。男の出入りを見たことはない。顔を合わせば、右隣の二人の愚痴を聞かされる。そういった都合も手伝って、情に流され、また奴を部屋に入れてしまった。

でも、どうして来たんだろう。

それなりに表面上の付き合いを気にするジュンは、左隣のおねえさまの事を気にして、家に来るときは連絡を入れ、いつも静かにやってきた。

たとえ顔を合わす事があっても、きちんと挨拶をして礼儀正しくしていたから、左隣のおねえさまの評価は良かった。

「…そんな話したいなら彼女にでもすればいいでしょ」
「いらだちもピークに達してきた。本当に何しに来たんだろう。」

欲しい時、あなたは一緒にいてくれないじゃない。

欲しい時、あなたは欲しい言葉を言ってくれないじゃない。

泣きそうになるのを懸命に堪えている。入れてあげようかという弱い心に必死で戦っている。

沈黙を破ったのはジュンだった。

「…別れるから」

下を向きながら、ぼそっとそう呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5632a/>

明けた空に見えたモノ

2010年10月17日03時13分発行